二〇一三年一月三十一日
集刊東洋学　第一〇八号　別刷

嘉慶閩浙海賊問題叙述の系譜

豊岡　康史

『集刊　東洋学』108号

嘉慶閩浙海賊問題叙述の系譜

豊岡　康史

はじめに

清代乾隆末から嘉慶年間にかけての時期、東南沿海域（浙江・福建・広東）では海賊問題が発生していた。この海賊問題は、同時期の白蓮教反乱や天理教反乱などと並ぶ反乱のひとつとして、検討が加えられてきた[1]。それらの研究のほとんどは、魏源『聖武記』（道光二十六年三次重訂本）巻八「海寇・民変・兵変」に収録される「嘉慶東南靖海記[2]」と題する五千字足らずの一文の枠組を踏襲している。

アヘン戦争前後のいわゆる「経世知識人」魏源があらわした『聖武記』は、清朝歴代の皇帝による「武功」を列挙する清代通史である[3]。著者魏源が、近代西洋とのかかわりのなかでの「先覚者」として称揚されたこともあるが[4]、『聖武記』のコンパクトな記述は概要をつかむには有用であったし、特に、アヘン戦争以前の清朝の軍事行動に関する研究において、『実録』・上諭・奏摺・題本などが利用可能となる以前には、類書はなかった。『聖武記』がたとえば清代諸反乱の研究において第一に見るべき書物として長く利用されたのも当然であろう。

一方で、魏源の記述は正確さを欠き、その枠組をそのまま踏襲しては、十分な分析が行い得ないことも、つとに指摘されている[5]。その意味で、魏源の著作は正確性を欠く二次史料と位置づけられるのだが、他方、なぜ魏源が誤認・誤記をしてしまったのか、という問題はあまり触れられていない。そもそも、魏源の著作における種々の誤りは、著者本人の理解不足によるものなのか。魏源はただ当時の一般的な認識に沿って著述していただけではないのか。

『聖武記』が取り上げる「武功」の多くは、『方略』（軍事行動終了後、その軍事行動を記録した清朝の公的な報告書）によって、公的な位置付けが定まったもので、『聖武記』

における記述は『方略』と大きく変わることはない。一方、魏源は『方略』に拠らない「武功」も多く扱っている。では、それらの特に所与の枠組のない記述はいかなる材料を利用したものなのか。本稿では、魏源が『方略』に基づくことなく記述を行った、嘉慶年間の海賊問題、すなわち「嘉慶東南靖海記」がどのような材料によって著述されたのかを検討する。第一節でみるように「嘉慶東南靖海記」にはさまざまな事実誤認が含まれるが、本稿の目的はそれをひとつひとつあげつらうことではなく、なぜそのような書かれ方をしているのかを問うことにある。

以下、本稿では、「嘉慶東南靖海記」の内容と枠組を確認した後、「嘉慶東南靖海記」に先行する海賊問題に関する言説との関連を検討し、嘉慶海賊問題叙述の系譜を復元する。『聖武記』が刊行された道光二十年代において、嘉慶海賊問題は多くの関係者が生存するいまだ記憶に新しい事件であった。本稿での作業は、魏源の著作の或る部分の材料を確定するものであるが、同時に道光年間の人々にとっての現代史叙述の在り方を検討するケーススタディともなろう。

第一節　「嘉慶東南靖海記」の内容とその枠組

「嘉慶東南靖海記」が含まれる巻八は、台湾接収や台湾における反乱鎮圧など、東南沿海域における軍事行動と、それ以外の小規模な反乱鎮圧に関する記述によって構成される。また、「嘉慶東南靖海記」は、巻六「乾隆征撫安南記」の続編でもあり、対ベトナム関係を叙述するものでもある。以下、まずは「嘉慶東南靖海記」の内容を紹介しよう。

一　「艇盜」の出現と消滅(6)

「嘉慶東南靖海記」は、康熙年間に台湾鄭氏が降伏し、それによって東南沿海に駘蕩たる平和が訪れたこと、その平和が「国を盜んだ」安南国王阮光平父子(7)の配下である海賊集団「艇盜」によって破られたことから筆を起こしている。「艇盜」は、毎年、季節風に乗って、夏になると北上し、「土盜（地元海賊）」とともに広東・福建・浙江沿海で海賊行為を行い、冬になると南下しベトナム海域へ戻っていた。

「嘉慶東南靖海記」において、安南国と「艇盜」の関係は、嘉慶元年（一七九六）における「陳天保」の逮捕と、嘉慶四年（一七九九）に「安南農耐旧阮王」が献上した「莫扶観」の供述によって発覚する。「旧阮王」は当時、ベトナム南部を支配し、北上の構えを見せていた広南阮氏阮福暎

政権を指す。阮福暎（清朝側では「阮種」あるいは「阮福映」と記録している）は、もともと広南阮氏の血を引く由緒正しい家柄の出身であり、のちに「越南国王」に冊封される親清的な人物として描かれる。一方、「国を盗んだ」「新阮王」阮光平父子は海賊行為を教唆する敵役とされた。

実際に「陳天保」即ち陳添保が欽州に投降したのは嘉慶六年（一八〇一）のことであり、「莫扶観」即ち莫観扶が阮福暎によって献上されたのは嘉慶七年（一八〇二）のことであった。確かに、嘉慶元年には范光喜という「安南総兵」が福建で逮捕され、以降も多くの安南海賊が拘束されているが、嘉慶七年まで、阮福暎が海賊を捕縛して清朝に献上するという事態は見いだせず、この間、むしろ阮光纘政権が海賊を捕縛して献上した例があった。なぜこのような取り違えが発生するのだろうか。これは、次の部分で語られる「神風蕩寇」の重要性を強調するためには嘉慶五年（一八〇〇）以前において、すでに「艇盗」は阮光平らが教唆したものであることが発覚していなければならなかったためである。

「神風蕩寇」は、嘉慶五年六月、浙江省台州府龍王堂松門下に集結した「艇盗」が、暴風雨によって一夜にして覆滅し、残党を浙江当局が鹵獲した事件である。[8]「嘉慶東南靖海記」では、この事件により、中国沿海を跋扈する「艇盗」は大打撃を受け、それとほぼ同時に安南国が滅亡し、越南国が成立することで、ベトナムと海賊の関係が完全に切り離されたとする。「神風蕩寇」が重要なものとして扱われるもう一つの理由は、それが「嘉慶東南靖海記」の第二部分における主役である清朝浙江当局の管轄下で発生したことにある。「艇盗」の覆滅＝「神風蕩寇」はこれ以降の主人公の一人、李長庚が初登場する重要な場面であった。「神風蕩寇」の重要性を担保する安南国と海賊の関係はその事件の前に説明されていなければならなかったのである。

二　李長庚と蔡牽と福建当局

「神風蕩寇」と安南国の滅亡により「艇盗」が消え去ると、残党は全てが蔡牽集団に吸収・統一されたとされる。嘉慶七年以降の「嘉慶東南靖海記」の記述は、浙江提督李長庚と蔡牽集団の戦いの記録が中心となる。

海賊の猖獗に対して清朝が最初に行った対応は、官軍の装備の劣悪性の克服であったとされる。そこで、言及されるのは「広東総督」長麟の米艇の改造と、浙江巡撫阮元と李長庚による「霆船」の建造であった。その次に引く、「海防」論も広東巡撫孫玉庭が呈出したものであり、[9]海賊対策は広東が先行しておこなっていたことが読み取れる。しか

し、広東の状況についてはこの時点では説明がなされず、その後に続くのは蔡牽と阮元・李長庚の戦いの記録である。

李長庚が浙江提督総統閩浙水師に任命されることによって開始される蔡牽と李長庚の物語の最初の山場は、嘉慶八年正月における浙江定海における海戦である。ここで大敗した蔡牽は福建に逃げ延びるが、「閩総督」玉徳の「迂闊さ」により、蔡牽をとり逃がしてしまう。また、蔡牽が福建に現れた際、「浙江総兵」胡振声が「閩総督」玉徳の無理な命令、及び福建水師が救援に向かわなかったために戦死するという事件が取り上げられる。ここで福建当局が非協力的であったことが示唆される。

嘉慶十年（一八〇五）の冬から翌年にかけて、蔡牽集団は台湾に上陸し、台湾府城を包囲するに至る。その後、蔡牽は李長庚の掃討作戦によって台湾から脱出するが、台湾擾乱を叙述する際に強調されるのは、福建当局指揮下の兵士の腐敗である。福建当局の腐敗についての記述はその後も続く。玉徳が李長庚の弾劾を受けて解任された後、その後任の阿林保を焚き付けて李長庚を弾劾し、排除しようとしたのは福建の「文武官吏」であった。そして、その腐敗した福建の讒言から李長庚を救ったのは服喪のため離任していた阮元の後任の浙江巡撫清安泰であった。嘉慶十二年（一八〇七）、李長庚は蔡牽集団との戦闘中、戦死するが、その際、圧倒的に有利な状況にあったにもかかわらず、清朝水師が蔡牽を取り逃がした理由を魏源は、福建水師提督張見陞の「庸惰」と、福建水師の廃弛に帰している。ここに李長庚を後援する清廉な浙江当局と李長庚を掣肘する腐敗した福建当局という明らかな構図が見て取れよう。

李長庚の戦死後、その「旧部下」が遺志を継ぐことになった。以降、海賊対策は順調に進み、海賊の相次ぐ投降や朱濆の死亡、閩浙総督が方維甸に交代するなど多くの肯定的な要素を書き連ねることによって海賊問題は収束を迎える。最後に記述されるのは浙江・福建水師と蔡牽の死闘であり、蔡牽の自沈であった。そして、蔡牽集団の消滅により福建・浙江の海賊は全て消え去ったとする。

順序は前後するが、二次改訂本・三次重訂本「嘉慶東南靖海記」の末尾には『嘯亭雑録』の一節が引用される。そこでは清廉な浙江提督李長庚、そして蔡牽がばら撒いた賄賂に群がる福建の兵士、清廉潔白な李長庚を忌み嫌い死へと追いやった「閩督」阿林保という像を提示することによって明確な浙江と福建の対比がなされている。そしてそれは方維甸という新たな閩浙総督の着任、戴衢亨というすぐれた軍機大臣の登場により解決される。この逸話は「嘉慶東南靖海記」本編で提示したものと同様の構図を共有しているものであり、腐敗した福建と清廉な浙江を対比する構図

を強化することになっている。

『聖武記』初版本（道光二十二年）[10]には、『嘯亭雑録』は引用されていない。本文の異同は少ないが、初版本の魏源による按語では、嘉慶帝を称揚した後、明代の戚継光と張居正・譚綸の関係を挙げて、当局者が良好な関係を保つことの必要性が説かれており、結論が異なっていた。二次改訂本が刊行された道光二十四年までの二年間で、腐敗した福建と清廉な浙江の対比を強調するものにブラッシュアップされたと考えられよう。

三　広東における状況

蔡牽集団消滅が描写されたのち、唐突に広東の話題が開始される。広東の記述で中心となるのは、浙江における詳細な戦闘の記録とは対照的に、海賊取り締まりに関する大局的な方法論であった。話題はまず嘉慶十年の、招撫政策を主張した那彦成の解任と、呉熊光の両広総督任命に戻る。呉熊光は、陸上と海賊の関係を絶つ方策を主張し、その方策は後任の両広総督百齢によって強化される。その結果、困窮した海賊が河川を遡上して、放火略奪を働き、その後、投降するという事態が記述される。その後の嘉慶十五年（一八一〇）二月前後の郭学顕集団・鄭乙妻集団の投降とその他の海賊の殲滅をもって海賊に関する記述は終る。それらを総括するのが嘉慶帝による「杜絶接済」（陸上から海賊への物資供給の遮断）を称揚する上諭である。魏源は海賊を鎮圧できた理由を、嘉慶帝の上諭をなぞりながら以下のようにまとめた。即ち、白蓮教叛乱とともに嘉慶初年の大きな患いとなっていた東南海上の海賊の猖獗は、「聖主」嘉慶帝の「杜絶接済」政策の推進により終焉を迎えた、この意味において嘉慶帝こそが海賊鎮圧の最大の功労者であった、と。

ここで、これまで見てきた「嘉慶東南靖海記」の中で些か落ち着きの悪い位置にあった広東に関する記述の存在価値が了解される。広東において成功した孫玉庭の「海防論」や、呉熊光から百齢に継承される「杜絶接済」即ち陸上から海賊への物資供給遮断政策は「聖主」嘉慶帝の意向に沿うものであったのである。浙江・福建において記述されるのは海賊の大首領たる蔡牽とそれを追う李長庚・阮元を中心とする清廉な浙江当局、そして玉徳・阿林保などによって代表される海賊退治を掣肘する腐敗した福建という図式であった。ここに嘉慶帝の出る幕はない。しかし、広東に関する記述を挿入することによって嘉慶帝による海賊鎮圧という大局に関する図式を提出することができるのである。

四　「嘉慶東南靖海記」の含意

では、魏源はなぜ「杜絶接済」を称揚するのか。魏源が「嘉慶東南靖海記」において見出す「杜絶接済」政策は具体的には文中の孫玉庭の「海防」論をもとにしたものである。その「海防」論は端的に言えば、海上で海賊掃討作戦を行うよりも、物資供給を遮断し、困窮した海賊を水際で上陸時に叩くほうが効率的というものであり、『海国図志』巻一「籌海篇（議守上）」の載る魏源の「海防」の具体的な方法と合致する。また、これらの論理は魏源が編集に加わった『皇朝経世文編』巻八十五「兵政十六、海防下」とも近い[11]。即ち、魏源は、海賊問題の中心に浙江における蔡牽と李長庚の戦いを置きつつ、同時に自らの「海防」論の成功例として、「正しい」政策を取った嘉慶帝を称揚するために広東の海賊問題を語ろうとしていたといえよう。

さらに、魏源にとって重要なのは、「嘉慶海賊」を叙述する際に出現した「夷」であった。魏源は「嘉慶東南靖海記」の最後に、海賊の由来としての「夷」＝安南を再び強調した。そして嘉慶十五年の広東海賊鎮圧において、英国と澳門の技術を取り入れようとしなかった広東当局の態度を批判し[12]、「夷に師して以て夷を制す」（「師夷以制夷」）という主張を述べて終るのである。

すなわち、「嘉慶東南靖海記」の枠組は以下のようなものであったといえよう。簒奪者安南国王父子に送り込まれた海賊「艇盗」は、嘉慶五年の「神風蕩寇」と、安南国の滅亡・恭順な越南国の成立によって消滅するが、残党は蔡牽という巨魁の配下に組み入れられ猛威を振るう。これらを名将李長庚と浙江当局が鎮圧できなかったのは、腐敗した福建当局が掣肘していたからである。最終的には閩浙総督の交代と、李長庚の「旧部下」の奮闘により、海賊問題は解決したが、根本的な海賊対策は魏源も主張する広東で施行された「杜絶接済」政策に基づくものであり、それを提示したのは「聖主」嘉慶帝であった。このように「嘉慶東南靖海記」は図式化され、同時に魏源の主張がふんだんに練りこまれた言説であったといえよう。

第二節　浙江当局の海賊問題認識

魏源は、嘉慶海賊問題を叙述するに当たり、浙江当局を中心に据えた。では、その叙述の材料はどこからとったのか。本節では、「嘉慶東南靖海記」に先行する嘉慶年間における浙江当局内の嘉慶海賊問題当事者の記録―焦循「神風蕩寇記」・「神風蕩寇後記」・阮亨『瀛舟筆談』巻首、一、二、三について検討し、「嘉慶東南靖海記」との関連を確認する。「神風蕩寇記」および「神風蕩寇後記」の著者は浙

江巡撫阮元の幕下にあった焦循[13]で、両編は『雕菰集』巻十九に収録される。「神風蕩寇記」は嘉慶六年（一八〇一）春に「神風蕩寇後記」は嘉慶十四年（一八〇九）以降に成立したと考えられる。『瀛舟筆談』全十二巻は阮元の幕下にあった族弟阮亨[14]が、阮元の浙江巡撫としての功績について記録したもので嘉慶二十五年（一八二〇）成立のものである。その中の巻首から巻三にかけての部分に、浙江巡撫在任時代の海賊対策が年代順に記述されている[15]。それぞれ、浙江巡撫阮元に近しい立場にある人物によるものであり、浙江当局による海賊対策の記録であると考えて良いだろう。なお、『瀛舟筆談』は「神風蕩寇記」を全文引用しており、これらの間では認識の明確な相違はない。

浙江省には、巡撫一名が置かれ、浙江省内の行政をほぼ一人で管轄していた。本来は、閩浙総督と浙江巡撫は連名で上奏などを行うべきであったが、福州に駐箚する閩浙総督は、杭州に駐箚する浙江巡撫に対し影響力を行使することはあまりなかった。浙江巡撫は、嘉慶元年から四年年末まで玉徳[16]が務め、その後、嘉慶五年から十三年秋まで阮元が務めた。十三年以降は、蒋攸銛が浙江巡撫に任命されている。この間、嘉慶十年から十一年にかけて、阮元の丁憂に際し、浙江布政使清安泰[17]が代役を務めている。すなわち、嘉慶五年から十三年まで、浙江当局は一貫して阮元幕府の強い影響下にあったといえよう。

一　「艇盗」と「神風蕩寇」

「神風蕩寇記」では、阮元が海賊対策に関わることとなった前史として、嘉慶初年に阮元が浙江学政であった際、科挙受験生の家族が海賊の被害に遭ったことを記している。阮元が浙江巡撫に任命されたのは、嘉慶四年の年末のことであった。当時の海賊問題の現状に関して「神風蕩寇記」は以下のように記す。

> 艇賊は福建海賊の先導を受け、福建海賊は艇賊の威勢を借りている。浙江の海域は南北二千里余りに及び、我々が南下すれば彼らは北上し、我々が北上すれば、彼らは南下し、とらえどころがない。我等が艇賊に対処していると、福建海賊が勝手に略奪を行い、福建海賊に当たれば、艇賊が邪魔をする。また艇賊は強大で、戦闘に入っても必勝とはいかず、福建海賊は狡猾で、遭遇する前に接近を察知して逃げ去ってしまう。

この部分は「嘉慶東南靖海記」の表現[18]とほぼ同じであり、魏源が「神風蕩寇記」を参照していることが明らかである。

このような「艇賊」の活動に対し、阮元は地元有力者らの意見を聴取し、保甲による沿海住民の管理強化と、兵船や大砲などの武備強化が方針として定められたという。こ

れを受けて阮元は新型の兵船と大砲の建造を上奏するが、白蓮教反乱を理由に戸部は支出を拒否したため、浙江当局は捐納によって兵備強化の財源を得た。また、兵船の建造は李長庚に一任された。なお、この間、閩浙総督と福建当局は全く現れず、「海防論」に類似する意見も現れない。

嘉慶五年六月、台州に集結した「艇賊」は暴風雨によって一夜にして覆滅し、安南の勅文・総兵の銅印が発見され、同時に「善艚隊大統兵進禄公倫貴利」が逮捕された。ここで「神風蕩寇記」は嘉慶元年に逮捕した安南総兵范光喜の供述を基に安南における政治状況を叙述し、倫貴利らベトナム海域から来た海賊たちは、安南国王に隠れて勝手に活動していたとしている。「神風蕩寇記」はこのあと、暴風を「神風」であるとして神仙への感謝を表すべく、台州松門に天后宮と龍王廟を建設したと記して終わる。『瀛舟筆談』巻一では、この「神風蕩寇記」を引用したのち、倫貴利の供述を引用し、「新阮の権臣である陳宝玉侯」が「幼く愚かな国王阮光纘」に隠れて海賊行為を行わせていたとする。阮亨によればこのとき、白蓮教反乱がなければ広東・広西から安南へ遠征をおこなうべきであったとする。

とまれ、安南からの海賊は、「神風蕩寇」によって大きな被害を受けた。その海賊は、安南国の主力艦隊であり、「神風蕩寇」は安南国滅亡の要因の一つであるとされた。このように浙江当局は、国王の積極的関与は認めないものの、海賊問題の発端と安南国に関連があると認識していた。ただし、「嘉慶東南靖海記」とは異なり、「旧阮」阮福暎が海賊対策に協力的であったなどの評価はしていない。

二　蔡牽との戦い

『瀛舟筆談』巻首では、嘉慶十四年から十五年にかけての海賊覆滅の状況が概括されている。それによれば蔡牽に次ぐ巨盗朱濆は総兵許松年により南澳長山尾洋で撃破され、広澳外洋で死亡し、さらに蔡牽は閩浙両水師の追撃を受け、浙江魚山外洋から温州黒水外洋に逃れたが、自沈にいたるとする。その後の朱渥・張阿治の投降により「浙江省内はすべて治まった」とされ、さらに広東で烏石二集団を殲滅することによって「残さず掃滅」された。浙江当局者たちは広東までを含んだ海賊問題を念頭においており、蔡牽集団に特化したものとして扱ってはいない。

『瀛舟筆談』巻一は、安南海賊消滅後の浙江における海賊問題を時系列に沿って、阮元の上奏文を引用しながら、記録する。そこでは、大規模海賊集団としてまずは蔡牽集団が挙げられ、続いて侯斉添集団が取り上げられる。侯斉添殺害後は、蔡牽集団の活動とそれに対する李長庚の鎮圧活動が中心的に記される。また「神風蕩寇後記」に載せる、

蔡牽集団が嘉慶七年五月の台風で被害を受け、弱体化し、八年正月に李長庚・胡振声らに漁山において包囲されるも身をもって逃れ、福建に投降を乞う一連のくだりは「嘉慶東南靖海記」にほぼ受け継がれている。李長庚戦死にかかわる部分、邱良功・王得禄と蔡牽との温州黒水洋における戦闘に関する叙述のほとんども「嘉慶東南靖海記」に引き継がれている。最後も「嘉慶東南靖海記」と同様に蔡牽の自沈と朱濆の弟朱渥の投降によって「海寇悉く平らぐ」とされた。ただし、浙江当局者は、蔡牽集団以外に張阿治集団などが存在しており、蔡牽の排除のみでは海賊問題は解決したとはいえないと認識していた。阮元在任期間中に蔡牽集団を殲滅し、張阿治・駱仔廬集団を解体することには成功したが、『瀛舟筆談』は阮元の巡撫解任により、朱渥集団などの解体に関して詳述できないことに言及しており、蔡牽集団が、海賊のすべてであるかのような「嘉慶東南靖海記」の記述とはいささか異なっている。

また、「神風蕩寇後記」・『瀛舟筆談』ともに「杜絶接済」という海賊と沿海住民の関係を断絶しようとする方策を重視していない。「杜絶接済」という語は、『瀛舟筆談』巻三が引用する上諭の中に一か所確認できるのみである。確かに、保甲の強化による沿海住民の管理の重要性は主張されてはいるが、同時に武備の強化が一貫して重視されている。この点も「嘉慶東南靖海記」とは異なっているといえよう。

三　福建水師の評価

「嘉慶東南靖海記」ではたびたび福建の腐敗が取り上げられていた。一方、浙江当局の認識の中では、台湾で蔡牽を逃した際、台湾に渡らなかった福建の兵士や李長庚を掣肘した福建の大吏（玉徳を指す）が罪に問われたことが言及されるのみである。「神風蕩寇後記」も『瀛舟筆談』も福建水師の腐敗を指摘することはなく、むしろ、福建との協力が重要であると主張する。たとえば、蔡牽を覆滅した直後の邱良功の阮元への手紙の中で「署閩浙総督張師誠は福建水師が浙江水師よりも優秀であると上奏しましたが、実際は浙江水師のほうが優秀であります。（『瀛舟筆談』巻三）」と不満を吐露しているが、明確に福建当局を指弾する文言は見られなかった。実際には浙江提督在任中の李長庚が台湾で蔡牽を取り逃したのは福建の責任であると弾劾しており、[19] 浙江当局内においても福建当局への不信感が存在していたと思われるが、浙江当局者が残した記録にはその痕跡は見られない。

四　浙江当局の認識

以上の分析から、浙江当局は海賊問題を大枠以下のよう

にとらえていたといえる。

①海賊問題の発端である「艇匪」は安南国の教唆によって、閩浙海域へ侵入した。②これらは「神風蕩寇」によって覆滅し、③浙江においては蔡牽集団が最大ではあったが、それ以外にもいくつかの海賊集団が存在していた。④海賊対策は沿海住民の保甲による管理とともに、武備の増強が重要であり、⑤同時に福建との協力が必要であった。

これらの認識は、前節でみた「嘉慶東南靖海記」の記述と少しく異なる部分がある。「嘉慶東南靖海記」では、「神風蕩寇記」・「神風蕩寇後記」の記述をそのまま踏襲している部分がしばしばみられる（ただし『瀛舟筆談』の記述は全く引用されていない）が、「艇匪」の出現・消滅と、ベトナムの政情を強く結びつけていたり、蔡牽の存在を特別視し、「杜絶接済」を称揚し、福建の腐敗を指弾するなどの要素は浙江当局の記録からは見いだせない。また、浙江当局がしばしば言及した武備について魏源はそれほど重視していない。どうやら、魏源は多くの文言を浙江当局の記録（就中、「神風蕩寇記」「神風蕩寇後記」）から採っていたにもかかわらず、叙述の枠組としては異なるものを利用していたようである。では、魏源が利用した枠組はどこに起源をもつものなのだろうか。

第三節　李長庚の伝記群

一　李長庚の伝記

嘉慶年間の海賊問題に関して、ひとまとまりの叙述を行うものに、浙江提督李長庚の伝記が挙げられる。まずは嘉慶十年代後半、李長庚死去と海賊問題解決からあまり時間を経過せずに成立したとものを想定成立年代順にあげよう。

洪亮吉「李忠毅公墓誌銘」（『馬巷庁志』付録上）
阮元「壮烈伯李忠毅公伝」（『碑伝集』巻一百二十二／『馬巷庁志』付録上）
陳寿棋「建威将軍浙江提督総兵官追封三等壮烈伯忠毅李公長庚神道碑文」（『碑伝集』巻一百二十二／『馬巷庁志』付録上）
王芑孫「浙江提督総統閩浙水師追封三等壮烈伯謚忠毅李公行状」（『碑伝集』巻一百二十二／『皇朝経世文編』巻八十五）
惲敬「浙江提督李公墓闕銘」（『碑伝集』巻一百二十二）[20]

これら伝記のプロットはほとんど同様である。福建省同安県に生まれた李長庚は武挙に合格したのち、浙江・福建において武官としてのキャリアを積んでいく。最初の活躍は、海壇鎮総兵を革職されて民間にあった時、林爽文反乱[21]が発

生したため、自ら私兵を集めて、福康安の鎮圧活動に協力したというものであった[22]。このとき福康安は李長庚を高く評価していたことが言及される。続いて、浙江で総兵に任じられた李長庚は、乾隆末年の福建海賊林明灼を捕えるなど海賊対策に活躍したのち、さらに浙江海域に侵入した安南海賊を追撃し、嘉慶五年、浙江台州で暴風雨に乗じて倫貴利率いる安南海賊艦隊に大打撃をあたえる。その後、嘉慶六年から福建水師提督となり、ついで浙江提督へ異動し、海賊の首領蔡牽との戦いを続ける。このとき浙江巡撫阮元とは極めてよい関係にあった。たとえば浙江の新型兵船「霆船」は、阮元が費用を集めて、李長庚に建造を委託したものであった。蔡牽は、漁山で福建・浙江水師に包囲されるが、福建水師に偽って投降したところ、閩浙総督玉徳を中心とする福建当局がこれを信じたため、蔡牽に逃亡を許す。さらにたびたび福建当局の非協力的態度により蔡牽を取り逃がす。蔡牽は、嘉慶十一年（一八〇六）、台湾へ攻め込み、台湾県城を囲む。これを三千名の兵力で撃退したのが李長庚であった。しかし、李長庚は玉徳及び福建当局の各層からの讒言を信じた新任閩浙総督阿林保によって、弾劾を受ける。これに対し、阮元に代わって浙江巡撫の任にあった清安泰が、李長庚を擁護した。これを受けて嘉慶帝は、前任の閩浙総督玉徳が度々李長庚の海賊鎮圧活動を掣肘していたことを指摘し、阿林保を詰責する。嘉慶十二年、蔡牽を追撃していた李長庚は、追い詰めたところで海賊側の銃撃を受け死亡する。このとき、福建水師提督張見陞は臆病で、これを座視したため、蔡牽を再び取り逃すこととなる。李長庚の戦死は、嘉慶帝に深く追悼の念を起させ、壮烈伯に封じられた。その後、李長庚の部下であった浙江提督邱良功・福建水師提督王得禄らによって、蔡牽は滅ぼされ、沿海域には平和がもたらされた。

以上のプロットが、ベトナム情勢に関する情報、広東海賊に関する記述を除けば、「嘉慶東南靖海記」に極めて似ていることは明らかであろう。特に注目すべきは、閩浙総督の掣肘や腐敗した福建水師といった、福建当局の非協力的な態度についての指摘が見いだせる点である[23]。福建当局の責任を指弾するような言説は李長庚の伝記に共通して見いだせるものであった。これが「嘉慶東南靖海記」に含まれる清廉な浙江・腐敗した福建という言説のもととなっていることが予測される。とはいえ、ここではまだ福建の「腐敗」と李長庚を支える浙江という明確な図式化はなされていない。次に『嘯亭雑録』に含まれる李長庚の伝記を検討してみよう。

二　「李壮烈戦績」

「李壮烈戦績」は『嘯亭雑録』巻三に収録される。『嘯亭雑録』は、礼親王昭槤が清代の逸事を集めて編纂したものであり、嘉慶二十年（一八一五）前後に成立したと考えられる[24]。その内容は事実の記録というよりも噂の集積であり、事実よりもむしろ、嘉慶末年当時の様々な事件に対する（誤認を含む）一般認識を如実に示すものであるといえよう。その中のひとつの記事が、「李壮烈戦績」という李長庚の伝記であり、李長庚に関する当時の一般的な認識が抽出できると思われる。

「李壮烈戦績」は以下のように始まる。

福建はもともと豊かな地区であったが、総督の雅徳・伍拉納らが驕奢貪縦であったため、官僚は腐敗し、胥吏には懈怠が染み付き、洋上に盗艇が跋扈することとなってしまった。また、福建の水師は怯懦であり、且つ、提督の倪斯得[25]は耄碌していて規律を理解せず、海賊を取り締まろうにも兵士は逃げてばかりであった。故に蔡牽・朱濆が沿海で衆を糾合して、兵は十万を数え、嘉慶十年冬には台湾に突入するに至った。しかし、浙江提督李長庚の死を賭した働きにより、台湾を取り戻したのである。

ここでは、福建が雅徳・伍拉納の貪婪にゆえに廃弛し、海賊が増加したこと、福建水師は怯懦であったことなどが蔡牽の台湾擾乱を招き、それを李長庚の活躍によって挽回した事が語られる。ここでは、蔡牽の活動は台湾擾乱によって代表されている。その後、李長庚の履歴が語られる。

李長庚は同安県出身で、武科挙を経て官途に就き、浙江で副将に任じられた。このとき、福康安は彼を非常に評価していた。時恰も安南の阮光平が隠に叛意を抱き、その部下に命じて中国の海面で劫略をなさしめ、その利益を国庫に収めていたころであり、福康安は李長庚にこれらを取り締まるように命じた。これに李長庚は「官船は釘打粗く、木材薄弱であり、波濤に耐えられない。私が家財を擲って船を作るので、それを使っていただきたい。しかし、火薬だけは私に所蔵してはならないものなので、これだけは支給していただきたい。それ以外は全て自弁したい」と答えた。福康安は大いに喜び、彼を署総兵に推挙し銀数万を与えた。李長庚はこれを用いて海船数十隻を建造したが、無駄な飾りを付けることは無く、客船と見た目は変わらなかった。李長庚は三千名の兵を率いて夷艇を追ったところ、夷艇は李長庚の船を客船であると見て、針路を変えて襲撃しようとした。そこで李長庚は旗鼓を持ち出し、叱咤の声は数里に及んだ。更に、大風により海

は大いに荒れ、李長庚の兵は一騎当千の活躍をなし、賊の船団を壊滅せしめた。沈んだ賊船は数百に及び、俘・斬は数千を数えた。更に偽官倫貴利らを捕えて福康安に献じた。これを受け、福康安は李長庚を海壇鎮総兵に推挙した。このとき浙江巡撫であった阮元は李長庚に非常な信頼を置いた。李長庚は武人であったが、読書や静座を好み阮元と日々詩文の応酬を行っていた。

これが先に挙げた李長庚の伝記の「神風蕩寇」までの時期の部分を縮めたうえで、いくつかの要素を加えたものであることは明白であろう。まず福建が、雅徳・伍拉納らによって腐敗し、蔡牽や朱濆の活動を促したことが言及され、福建が悪役であることが示唆される。その後、李長庚が林爽文反乱の時に福康安に協力したことと、安南海賊問題が混同されている。注目すべきはここでは安南夷匪は「隠に叛意を抱く（「陰叛本朝」）」安南国王が派遣したものであり、それは安南国の国家財政のためのものであったとされることであろう[26]。この言説は、魏源「嘉慶東南靖海記」にもみられるが、浙江当局の記録や李長庚の伝記には見られないものであった。おそらく、「李壮烈戦績」において付け加えられた要素であろう。また、倫貴利を捕えたのは福康安となっているが、その後、すぐ浙江巡撫阮元が出てくる。そして蔡牽との戦闘の記録になる。つまり、「李壮烈戦蹟」は、蔡牽登場以前の李長庚の履歴を圧縮し、福康安に評価されたこと、倫貴利を捕えたこと、阮元とよい関係にあったことをまとめて語ってしまっているのである。

ここで現れる李長庚が「三千名」の兵を率いていたという表現は惲敬「浙江提督李公墓闕銘」にみられる嘉慶十年に李長庚が台湾に渡った際の表現をもとにしたものだと考えられる。また、福康安が李長庚に銀を与えて船を作らせたという記述は阮元が李長庚に「霆船」の製造を委託したという逸話に基づくのであろう。ここでの記述は安南夷匪と台風の存在や文章表現の相似[27]から「神風蕩寇」を指している事は間違いないだろう。李長庚は安南夷匪を撃退することで世に出た人物として説明されているのである。この点は「嘉慶東南靖海記」と一致する。

その後に台湾の役として蔡牽の台湾擾乱について語られる。そこでは、蔡牽を包囲した際に福建の兵はまったく役に立たなかったが、それは蔡牽から賄賂がばら撒かれていたからであるとする。その後、閩浙総督阿林保から、適当な首級を蔡牽のものだと偽って提出すればよいではないかと持ちかけられたことを断ったとしている。そして、李長庚が嵐に遭って音信が途絶えた際には阿林保に弾劾されたが、その際、李長庚を弁護したのは阮元であったとしてい

る。ここで注意したいのが、李長庚が台湾で蔡牽を破って内地に帰ってきたとき、実際には閩浙総督は玉徳であったことである。そもそも、この「李壮烈戦蹟」には玉徳は登場しない。福建を代表する大吏は阿林保のみが登場し、悪役を一手に引き受けているのである。後に阿林保が李長庚を弾劾した際、李長庚を実際に弁護したのは当時の浙江巡撫清安泰であったが、「李壮烈戦蹟」では阮元が弁護したとされている。

「李壮烈戦蹟」はその後、「嘉慶東南靖海記」が引用する部分にあたる、阿林保が、李長庚を臆病と詰って、死に追いやったエピソードを語る。最後に、閩浙総督が方維甸に代わり、戴衢亨が軍機大臣に任命されたことと、旧部下である邱良功・王得禄の活躍によって蔡牽が逮捕され、海賊はすべて鎮定されたとしている。

以上の記述から浮かび上がる海賊問題像は以下のようなものであろう。即ち福建の腐敗と「陰叛」する安南によって拡大した海賊は蔡牽によって束ねられ、蔡牽は台湾を擾乱するに至る。この対策にあたっていたのは李長庚であった。彼は福建の妨害に遭って遂には命を落とす。その後、蔡牽は彼の旧部下によって排除され海賊問題は解決する。このように「李壮烈戦蹟」は、李長庚の伝記に負うところが大きかった。そして、「李壮烈戦蹟」を見る限りは、海賊問題は、李長庚と蔡牽の戦いに他ならなかった。

三　嘉慶末年における海賊問題認識

「李壮烈戦蹟」の叙述は、それに先行する李長庚の伝記と非常に似ていることが明らかとなった。しかし、「李壮烈戦蹟」におけるいくつかの要素が、それ以前の言説にくらべ、強調されている。その代表的なものとして、福建が「腐敗」しているのに対し、阮元を中心とする浙江当局は李長庚を支えていたという、福建と浙江の対比である。

嘉慶年間前半における福建の「腐敗」を指弾する論理は、『嘯亭雑録』のほかの部分では管見の限り見いだせない[28]。この福建の「腐敗」指弾は、李長庚が台湾で蔡牽の逃亡を許した責任を、当時の閩浙総督玉徳に帰して弾劾したところに淵源している。当時、浙江当局は言明しなかったが、その後の李長庚の伝記においては、福建当局が李長庚と浙江当局を掣肘する存在として現れた。これがエスカレートすることで、「李壮烈戦蹟」においては、李長庚を支える浙江と「腐敗」した福建の対比がなされたのであろう。

『嘯亭雑録』は先にも言及したとおり、嘉慶末年に成立した、種々の、とくに官界における噂話を集積して成立したものである。著者の礼親王昭槤はこれらの材料を自らが主宰するサロンのような場所から得たという。その内容は

嘉慶末年の北京の官界における一般的な認識に基づいたものであるといえるだろう。その中に含まれる「李壮烈戦蹟」は唯一の閩浙嘉慶海賊に関する文章であり、それが『嘯亭雑録』成立の数年前に解決した海賊問題を包括的に議論するものであった。[28]「李壮烈戦蹟」は、先行する李長庚の種々の伝記の情報やプロットをもとに、単純化して成立している。ここでは、海賊問題の叙述は、李長庚と海賊蔡牽との戦いの記録そのものであった。ここから、浙江提督李長庚が清廉潔白な主人公としてあらわれる。同時に、海賊問題は、蔡牽の存在によって代表されることとなり、蔡牽の消滅と海賊問題の解決は等号で結びつけられることとなるだろう。同時に、その李長庚の活躍を妨害するのは、福建の地方官や兵士であった。そのイメージは容易に福建の「腐敗」に結び付く。嘉慶末年においては、「嘉慶海賊」とはこのような枠組によって語られるものであった。

魏源は「嘉慶東南靖海記」を作成するにあたり、嘉慶末年までに確立し、『嘯亭雑録』にも載る、李長庚の伝記をもとにした枠組を利用し、そこに浙江当局者の記録から具体的な文言を抽出し組み合わせた。魏源は当初、その点を明確に自覚していなかったようである。『聖武記』初版本では、巻十二「武事余記（掌故考証）」において『嘯亭雑録』を引用しているにもかかわらず、巻八「嘉慶東南靖海記」においては地方・中央各官の協力が重要であると一般論を語るのみであった。つまり、初版本「嘉慶東南靖海記」と「李壮烈戦績」は共通の祖先をもつ並列した存在であった。これに対し、二次改訂本においては『嘯亭雑録』が引用され、福建と浙江の対比が明確となった。李長庚伝記群から『嘯亭雑録』へ枝分かれした系譜は、再び「嘉慶東南靖海記」二次改訂本において合流したのである。

その結果、出来上がったのが以下のプロットである。安南国王阮光平は陰叛して海賊を中国へ送りこみ、これを浙江当局が討ち、その後出現した蔡牽は浙江提督李長庚と戦い、李長庚は福建の「腐敗」した大吏に死に追いやられたが、李長庚の旧部下が蔡牽を倒し、沿海域は平和を迎える。このプロットに、魏源は自らの主張を載せて、「嘉慶東南靖海記」を構成したのである。

第四節　広東における記述と後代への影響

最後に広東の事象に関して確認しておこう。「嘉慶東南靖海記」にあっては広東にまつわる状況は、蔡牽集団鎮圧に付け加えて、「師夷以制夷」あるいは「海防」等にかかわる魏源の自説を強化する以外にはあまり意味がないものであった。百齢着任から張保仔の投降までの過程について

は、広東当局者による海賊処理に関する記録である温承志『平海紀略』[30]に拠っていると思われるが、広東における状況の記述の最後に「杜絶接済」を自ら称揚する嘉慶帝の上諭を置くことからも分かるように、その言及の意図は、先述の通り、魏源本人の「海防論」の補強にあり、広東の海賊問題そのものを叙述しようという意図は感じられない。そのため、「嘉慶東南靖海記」に載せる広東に関する情報は少なく、他の言説との比較は難しい。

これに対し、広東の地方志には、領域内に関する比較的詳細な記録が残る。広東の地方志では、その海賊の出現に関して、「嘉慶東南靖海記」と異なり、安南が関与し、略奪を教唆していたという説を採用していない。むしろ安南国が滅亡して、その結果行き場をなくした安南国の華人部隊が、嘉慶八年（一八〇三）以降海賊となり広東を荒らした、というプロットを共有している。[31]なお、広東の地方志は、海賊活動のピークは嘉慶十四年前後にあり、張保仔らを投降させることでこの海賊問題を解決した両広総督百齢（嘉慶十四年着任）を称揚するという点も共通している。

福建・浙江の地方志も海賊問題についての地方志の記述のほとんどは当該行政区分内における地域防衛と団練・郷勇に関するものがほとんどであり、省レベルの鎮圧活動や海賊問題全体の展開などはあまり言及していない。[32]少なくとも清末までは、地方と中央では、言説の位相が異なっており、話題が重なること自体が少なかった。

ところが宣統『東莞県志』巻三十三「前事略五　国朝二」には奇妙な構成が見いだせる。『東莞県志』は『靖海氛記』を引用し、安南滅亡後の海賊活動活発化と地域防衛について説明する。その直後、「安南世系沿革略」[33]を引用し、「安南国王阮光纘」が海賊を教唆して、中国沿海に送り込んでいたとする。そこでは、嘉慶四年の「莫扶観献上」など、明らかに「嘉慶東南靖海記」を参照したと思われる説明がなされている。この説明は安南滅亡以前から海賊が広東沿海で活動していたとするものであり、その直前の『靖海氛記』の、安南滅亡により広東海域での海賊活動活発化という内容とは矛盾していた。それにもかかわらず、引用されるのはなぜか。これまで、広東の地方志の記述はほとんどその地方における情報から成立しており、中央などで流通する情報が流れ込むことはあまりなかった。ところが、清末になると中央における一般的な言説も地方志の中にみられるようになってゆく。『越南世系沿革略』（光緒三年／一八七七）、あるいは『国朝先正事略』（同治五年／一八六六）「李長庚伝」もほぼそのまま引用しているように、「嘉慶東南靖海記」は中央で広く流通していた一般的な嘉慶年間の海賊問題の叙述となっていた。宣統『東莞縣志』

ではどの中央の情報が、それ以前から広東で流通していた言説に接木されたのである。[34] 当時の地方志においては、必ずしも海賊問題の文脈の齟齬に関しては関心がなかったのであろう。

おわりに

本稿を通じて明らかになった、嘉慶海賊問題叙述の系譜を確認しておこう。嘉慶海賊鎮圧後、一般に流布した言説の淵源は、海賊鎮圧にあたった当事者である浙江当局の記録よりもむしろ、海賊と戦い戦死した李長庚の伝記群（嘉慶十五年前後）にあった。この李長庚の伝記群のエッセンスは『嘯亭雑録』「李壮烈戦蹟」（嘉慶二十年前後）に集められた。魏源も同様に、李長庚伝記群の枠組を踏襲し、細かい記述のみ浙江当局の記録を利用して、さらに自身の主張を加えて「嘉慶東南靖海記」（道光二十二年）を執筆した。そして、改訂に当たり、「李壮烈戦績」を引用し、嘉慶海賊問題に関わる叙述の型を完成させたのである（文末図参照）。

つまり、魏源が描く嘉慶年間の海賊問題は、嘉慶末年までに成立していた認識枠組に強く影響されていたのである。では、その嘉慶末年の認識はどのように成立したのか。

この問いは、なぜ李長庚と浙江当局が中心となるような語りが受け入れられたのか、という点と関連する。現職の浙江提督の戦死は、それなりに需要のある話題であったことは間違いない。さらに、その物語の中心である浙江当局の首座にあり、実際にそれを広めることとなった李長庚の伝記を執筆し、その後も官界に強い影響力を有してゆく阮元という人物が存在したことが決定的であったといえる。

乾隆五十四年（一七八九）進士及第後、翰林院庶吉士から各地の学政を歴任するなど、エリートコースを進んだ阮元は、浙江巡撫・河南巡撫・江西巡撫を歴任し、嘉慶末年に湖広総督、のちに両広総督・雲貴総督を経て、内閣大学士に至り、太子太保・太傅となるなど極めて順調な職歴を歩む。さらに阮元幕府は、多くの優秀な学者を抱え、本人も巻き込んで、多くの学術的な成果を上げていた。[35] 魏源・林則徐など道光年間に活動する官僚の多くも直接・間接的にその恩恵を被っていたし、存命中の太傅に否定的な意見を公にすることは難しかっただろう。一方で、李長庚を掣肘する悪役にされた玉徳[36]や阿林保[37]は嘉慶十年代後半には失脚し、官界に影響力を行使することはなかった。英雄的に戦死した浙江提督とその友人で現役屈指の大官、そしてその場に係累のいない悪役大官による物語は容易に受け入れられるものであっただろう。

このように、当時の政治状況に影響されて成立した「李壮烈戦蹟」の枠組は、魏源『聖武記』「嘉慶東南靖海記」を通じ、その後も強い影響力を保った。清末道光年間以降、時折言及される嘉慶閩浙海賊に関わる言説は、さきにみた広東の地方志も含め、ほぼすべて「嘉慶東南靖海記」の影響下にある。『庸閒斎筆記』（同治十二年／一八七三）巻六には「神霊蕩寇」という一文があり、「神風蕩寇記」が（明記されてはいないが）ほぼそのまま引用されているが、このように「神風蕩寇記」に直接アクセスする場合は非常に珍しい。むしろ以下のように、「李壮烈戦蹟」＝「嘉慶東南靖海記」の要素が短いエピソードのなかで言及されることがほとんどである。『郎潜紀聞初筆』（光緒六年／一八八〇）巻七「閩浙水師攻勦蔡牽」では福建水師と浙江水師の対立が示唆され、『郎潜紀聞二筆』（光緒七年／一八八一）巻十二「仁宗信任李忠毅」は、福建当局が李長庚を掣肘していたことが明記される。『郎潜四筆』（光緒十二年／一八八六）巻九「李長庚翰墨風流」には、李長庚と蔡牽が同郷であったことが記される。なお、『郎潜四筆』は李長庚に文章の才能があったとするが、この要素も、李長庚の伝記から「李壮烈戦績」を経由して、「嘉慶東南靖海記」に受け継がれていた要素である。

民国期、嘉慶末年の認識枠組に強く規定された「嘉慶東南靖海記」は蕭一山『清代通史』（一九二三）に、ほぼそのまま引用され[38]、その後、長らく嘉慶年間の海賊問題に関する学術研究に影響を与えることとなった。『清史稿』における魏源の諸著作の影響も、常識に属する。すなわち、嘉慶年間の認識枠組は道光年間の経世知識人の著作を通じて、二十世紀にまで生き延びたのである[39]。

注

（1）矢野仁一「嘉慶時代の艇盗の乱について」（『歴史と地理』一八－二、一九二六年）、佐野学「海寇の時代」（『清朝社会史』文求堂、一九四七年）、黄典権「蔡牽朱濆海盗之研究」（『台南文化』六－一、一九五八年）、勝田弘子「清代海寇の乱」（『史論』一九、一九六八年）、蘇同炳「海盗蔡牽始末　上・下」（『台湾文献』二五－四・二六－一、一九七四・一九七五年）、Dian H. Murray, *Pirates of the South China Coast 1790-1810*, Stanford : Stanford University Press, 1987. 松浦章『中国の海賊』（東方書店、一九九五年）など。ただし、Murray の研究は、後述の広東地方志と枠組を共有している。

（2）本稿では最も頻繁に利用された古微堂蔵板道光二十六年第三次重訂本所収の「嘉慶東南靖海記」に拠った。三次重訂本と二次改訂本（道光二十四年）との異同はほとんどない。初版本（道光二十二年）との異同については後述する

が、管見の限り二十世紀以降の海賊問題に関わる研究史において初版本が言及されたことはない。

（3）神田信夫「『聖武記』雑考」（『清朝史論考』山川出版社、二〇〇五年。初出『東方学会創立四十周年記念東方学論集』（東方学会、一九八七年）。

（4）百瀬宏『明清社会経済史研究』（研文出版、一九八〇年）、彭大成・韓秀珍『魏源与西学東漸』（湖南師範大学出版社、二〇〇五年）

（5）姚薇元『鴉片戦争史実考』（武漢大学出版社、二〇〇七年。初版一九四二年）、張書才「〈聖武記〉所記白蓮教起義史料辨誤」（『文献』一、一九七九年）、岡本隆司「魏源の塩法論を中心として」（『洛北史学』三、二〇〇一年）。

（6）この当時の清朝・ベトナム関係の実際に関しては豊岡康史「清代中期の海賊問題と対安南政策」（『史学雑誌』一一五－四、二〇〇六年）、吉開将人「「南越国長」阮福映―清代档案から見た阮福映の冊封問題」（『史朋』四〇、二〇〇七年）参照。

（7）西山阮氏阮文恵およびその子阮光纘を指す。西山阮氏は一七七八年、ベトナム中部で挙兵し、一七八五年までに広南阮氏・東京鄭氏を滅ぼし、安南黎氏を放逐し、さらに清朝の武力介入を撃退してベトナム北部支配を確立していた。その経過と、その後の西山阮氏と広南阮氏阮福映（のちの越南国王／大南国嘉隆帝）との抗争については、八尾隆生「収縮と拡大の交互する時代」（『岩波講座東南アジア史』三、二〇〇一年）、嶋尾稔「タイソン朝の成立」（『岩波講座東南アジア史』四、二〇〇一年）参照。

（8）張中訓「清嘉慶年間閩浙海盗組織研究」（『中国海洋発展史論文集』第二輯、中央研究院三民主義研究所、一九八六年）。

（9）孫玉庭「海防論」。嘉慶九年上奏。『延釐堂集』巻一所収。

（10）『聖武記』古微堂蔵板道光壬寅（二十二年）刊本。なお初版本と二次改訂本・三次重訂本の相違は、案語を除き、表現の細かい変更にとどまっている。

（11）『皇朝経世文編』巻八十五「兵政十六、海防下」には海賊対策に関する議論十編を載せる。そのうち八編（沈徳潜「防海」・周之夔「海寇策」・李治運「稽海船以清盗源疏」・周鎬「上李提軍書」・曾鏞「答秦観察問防海事宜」・陳庚煥「答温撫軍延訪海事書」・汪志伊「議海口情形疏」・程含章「上百制軍籌辦海匪書」）は魏源の海防論に近い議論である。

（12）嘉慶帝は海賊対策に英国・澳門の助力を求めることを禁じているが、実際には広東当局は共同して海賊対策にあたっている。Dian H. Murray, *Pirates of the South China*, pp. 131-136 参照。

（13）焦循（一七六三－一八二〇）。字は里堂。江蘇甘泉人。嘉慶六年挙人。考証学者。著作に『雕菰集』『論語通釈』『孟子正義』『雕菰楼詩詞』等がある。

（14）阮亨（一七八三－一八五九）。阮元従弟。嘉慶二十三年、貢生。考証学者。

（15）『雷塘庵主弟子記』（道光二十一年初刊本）の阮元浙江巡撫任期中の箇所は、『瀛舟筆談』のダイジェストとなって

いるため本稿では分析対象としなかった。

(16) 玉徳（?－一八〇八）。瓜爾佳氏。満洲正紅旗人。官学生。乾隆三十三年、内閣中書。乾隆六十年、山東巡撫。嘉慶元年、浙江巡撫。四年、閩浙総督。

(17) 清安泰（?－一八〇九）費莫氏。満洲鑲黄旗人。乾隆四十六年進士。湖南、広西、浙江布政使、河南巡撫を歴任。

(18) 「神風蕩寇記」：「艇既以閩爲向導、閩即藉爲聲援、浙洋自南距北二千餘里、我南則彼北、我北則彼南。我當艇則閩肆其劫、我當閩則艇爲之障。且艇強即遇亦未能必勝、閩狡即未遇已望而先走。」。『聖武記』巻八「嘉慶東南靖海記」：「土盜倚夷艇爲聲勢、而夷艇恃土盜爲鄉導。三省洋面各數千里、我北則彼南、我南則彼北、我當艇則土盜肆其劫、我當土盜則艇爲之援、且夷艇高大多礮、即遇亦未必能勝、土盜狡又有内應、毎暫遁而旋聚。」

(19) 『仁宗実録』巻一六一、嘉慶十一年五月癸酉条。

(20) おそらく、洪亮吉のものが最も早く、蔡牽殺害（嘉慶十四年）以前に成立し、次いで阮元のものが成立したと思われる。そのほか、陳寿棋・王芑孫・惲敬のものは順序は不明だが、阮元のものよりも後に成立したと思われる。また清末に成立した李長庚の伝記として以下のものがある。王宗炎「李忠毅公祠堂碑記」（『馬巷庁志』付録上）、李元度「李忠毅公事略」（『馬巷庁志』付録上／『国朝先正事略』）、王崧辰「老薑随筆」（『馬巷庁志』付録上）、「李長庚伝」（民国『同安県志』巻三十四「人物録・忠義録」）、「李長庚伝」（『清史稿』巻三百五十）。

(21) 李長庚が林爽文反乱鎮圧に参加したという記事は、『清稗類鈔』戦事類「福康安柴大紀平臺灣」にも見られる。

(22) 李長庚の清廉さを強調するエピソードとして福康安に対する火薬の請求にまつわるものが載せられている。

(23) このような福建の非協力的態度に関する記述は阮元「壮烈伯李忠毅公伝」にも見出せる。この点は、先に検討した浙江当局の公式の観点とは異なり、明確に当時の福建当局に対する不信感を示している点で興味深い。

(24) 神田信夫「『嘯亭雑録』と其の著者礼親王昭槤」（『清朝史論考』山川出版社、二〇〇五年。初出『オリエンタリカ』一、一九四八年）。

(25) 嘉慶七年三月から十年四月まで福建水師提督の任にあった倪定得を指すと思われる。

(26) このような、安南国王が海賊行為に積極的に関わったという言説（「安南関与説」）の成立過程については前掲豊岡「清代中期の海賊問題と対安南政策」参照。

(27) 「李壮烈戦蹟」における該当箇所の原文は「加以颶風大作、海濤洶涌、公士卒百倍、槍砲驟發、覆船数百殆盡、俘斬数千人、生擒夷僞官倫貴利等以獻。」これに対し、李長庚の伝記（「浙江提督總統閩浙水師追封三等壮烈伯諡忠毅李公行状」）の記述は以下の通り。「颶風作。覆賊舟幾盡。獲其僞侯爵倫貴仁。俘斬数千人。」

(28) 『嘯亭雑録』は特定の地域の問題よりは、むしろ乾隆末期の和珅と関係が深かった高級官僚の「貪汚」を指弾し、嘉慶帝が抜擢した官僚を称揚する。たとえば、巻十「嘉慶

初年督撫」には嘉慶期の有能な地方官として覚羅長麟・陳大文・覚羅吉慶・書麟・呉熊光・汪志伊・台布・初彭齢・王秉韜・荊道乾が挙げられている。

(29) 広東に関しては、張保仔集団が両広総督百齢によって招撫されたことが、別の文脈で簡単に触れられるに過ぎない。『嘯亭雑録』巻三「朱白泉獄中上百朱二公書」。趙翼『簷曝雑記』巻五、「海盗来降」には、最初に蔡牽が十年余り活動し、そのあとに朱濆があらわれ、そのさらにあとに張保仔らがいたとしているように、まずは蔡牽に触れるのが嘉慶海賊問題叙述の定石であった。

(30) 温承志『平海紀略』（『昭代叢書』癸集萃編所収）。ただし、文言が一致するわけではない。また、那彦成・呉熊光が両広総督にあった時期についての情報源は不明である。魏源が、直接、邸鈔などから調査した可能性もある。

(31) このようなプロットを共有しているものとしては、袁永綸『靖海氛記』（道光十年刊、道光十七年続刊。『田野与文献—華南研究資料中心通訊』（四六、二〇〇七年）に英国図書館蔵本を収録。翻訳に、Karl F. Neumann, *History of the Pirates who infested the China sea from 1807-1810. Translation of Yuan Yung-lun, Ching hai-fen chi*, London, 1831 がある。）と朱程万「巳巳平寇」（『南海県志』巻十四「列伝」朱程万伝所収）が挙げられる。両者とも原本は中国では散逸したが、以下の広東における地方志はこのどちらかを引用（あるいは重引）しており、嘉慶・道光年間において情報源として広範に流通していたことがうかがえる。道光『広東通志』、光緒『潮州府志』、嘉慶『澄海県志』、光緒『潮陽県志』、光緒『恵州府志』、光緒『広州府志』、同治『番禺県志』、宣統『東莞県志』、同治『南海県志』、宣統『南海県志』、民国『順徳県志』、道光『新会県志』、民国『香山県志』、光緒『肇慶府志』、民国『陽江志』、光緒『高州府志』、道光『重修電白県志』、光緒『呉川県志』、嘉慶『雷州府志』、光緒『瓊州府志』、民国『瓊山県志』。

(32) 前掲『馬巷庁志』は例外的に郷土の英雄李長庚の伝記を収録している。台湾の地方志は、蔡牽集団の台湾上陸をめぐる状況に焦点をあてる。道光『彰化県志』など。

(33) 徐延旭『越南世系沿革略』（『小方壺斎輿地叢鈔』十二秩所収）。和田博徳「越南輯略について：中国人の東南アジア知識と清仏戦争」（『史学』四四－四、一九七二年）。

(34) 清末以降の広東の地方志が中央や海外の学説などを頻繁に引用するようになっていることに関しては、程美宝『地域文化与国家認同：晩清以来「広東文化」観的形成』（生活・読書・新知三聯書店、二〇〇六年）参照。

(35) 水上雅晴「清代の幕府と学術交流：許慎の官衙をめぐる議論を中心として」（『北海道大学文学研究科紀要』一〇七、二〇〇二年。

(36) 玉徳は、閩浙総督解任後、嘉慶十三年に烏什辦事大臣に任命されたが、翌年死去した。なお息子である桂良（咸豊中、総理衙門大臣）のキャリアは、嘉慶二十四年（一八一八）四川順慶府知府から始まっており、嘉慶末年にはいまだ影響力はなかった。

（37）阿林保は嘉慶十四年、両江総督に転じたが、ほどなくして死去した。

（38）蕭一山『清代通史』中巻「東南海寇之役」は「嘉慶東南靖海記」に改行と小見出しを付け加え、『嘯亭雑録』巻三「李壮烈戦蹟」の引用は蔡牽撃沈に関わる記述の直後に置き、嘉慶帝称揚に関わる按語を削除している。

（39）同様の状況を、ほぼ同時期に発生した白蓮教反乱に関する研究においても見いだせる。山田賢「『官逼民反』考―嘉慶白蓮教反乱の『叙法』をめぐる試論」（『名古屋大学東洋史研究報告』二五、二〇〇一年）

付記：本研究は平成二四年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による成果の一部である。

嘉慶閩浙海賊問題言説の系譜

